

広 報 かなだの 風



金賞受賞作品『龍と鯉』 内容は4ページに紹

2001

4 / 1

NO420

もくじ

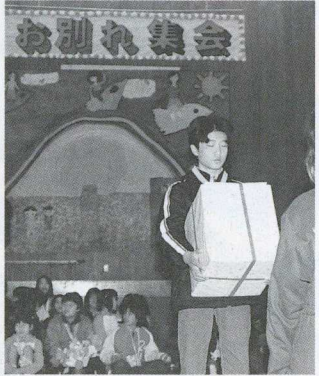
- 小・中学校のわだい P 2～
- かなだ日記 P 4～
- お元気ですか？ 食進会です！ P 8～
- みんなのひろば P 10～
- くらしの情報ほか P 12～



福岡県金田町

6年

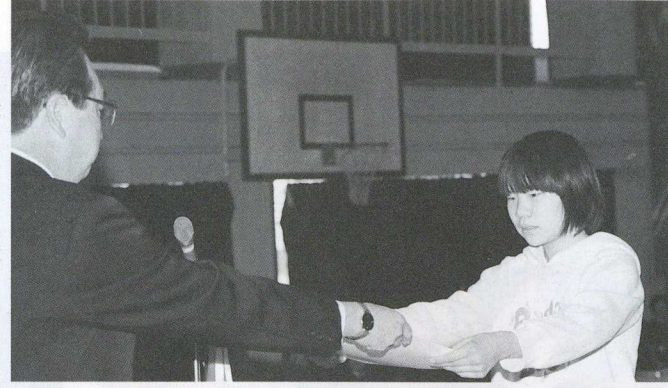
生96人がそれぞれ独自のパフォーマンス入場で始まった「お別れ集会」が、3月3日体育館でありました。



さようなら小学校

□をかたく結んだ表情に、緊張と決意が表われている6年生の卒業式が、3月17日体育館でありました。

卒業生96人の、親へのメッセージが大型スクリーンに映し出される中、校長先生より一人ひとりに卒業証書が手渡され、「卒業生の内7人が別の中学校へ進学しますが、1年生から6年生同級生へ手作り花のプレゼントを渡し、学年ごとに6年生へ心のこもった。



たお別れの言葉や手話を交えた歌・楽器の演奏をし集会を盛り上げ、その後6年生全員と先生一緒に、歌声が在校生の心に残るようにと、元気よく歌いました。最後に、ローソクに灯をともし、優しさや友情の炎を後輩に託しつつ、在校生、先生、保護者の見守る中なごやかな雰囲気退場しました。



お別れ集会終了後、10年以上の間、寒い日も暑い日も校庭や花壇の草取りをしてくれた、11人のおばちゃんを招いて「感謝の会」が行なわれ、5年生から感謝状とお礼の手紙が渡されました。「ほんとうに、長い間ありがとうございました。これからは、僕たち私たちが金田小学校をきれいにしていきます。」との代表者の力強い宣言でした。



別れのことは、小学校の思い出や夢が

はばたいていくこと、伝統を在校生が引き継いでいくことを、在校生との呼びかけにした、立派な卒業式でした。

友情の炎

泣いちゃった

One for all All for one (ひとはみんなのために みんなはひとりのために) をスローガンに、表現力と感性を培い、大きく花を咲かせた3年生が、3月15日中学校を卒業しました。



校長先生より一人ひとりに卒業証書が手渡され、卒業は出発ですと、激励の言葉が送られました。

3年生最後の授業は、仰げば尊しの合唱で始まり、3年間の心のアルバムを開くように、全員で呼びかけにし、卒業生はもとより在校生・先生・保護者も涙、ナミダではんかちが手放せない感動的な式でした。



『くちびるに歌をもて』『心に愛をもて』いつまでも忘れないように・・・。



笑っ

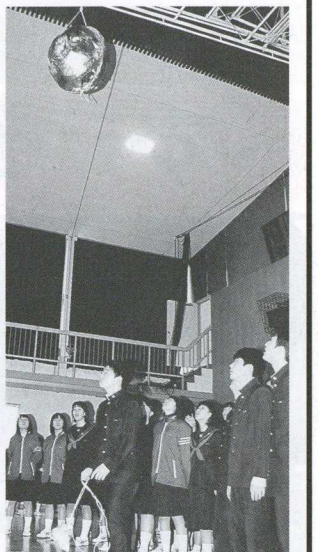
合唱コンクールでの自分たちの歌が流れる中、

で行なわれませんでした。3年生109人を含め全学年がそろそろ最後の集いで、〇×クイズや3年生担任による歌のプレゼント、全校生徒によるフォークダンスで、楽しい



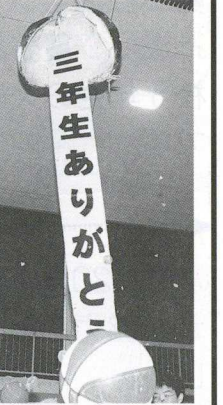
ルの高さを実感しました。圧巻はくす玉割り、3年生代表がひもを引くと、ひもだけ取れるハプニングに爆笑、バスケットボールを当てて割れると拍手喝采でした。3年生が頑張っている姿を後輩たちが引き継いで、さらにすばらしい金田中学校を築いて欲しいと思います。

公立高校入試前の一時を、楽しく思い出に残るようにと、3月7日「3年生を送る会」が体育館



レクリエーションの時間を過ごしました。

3年生は「ハレルヤ」を原語で高らかに歌いあげ、すばらしいハーモニーにレベ



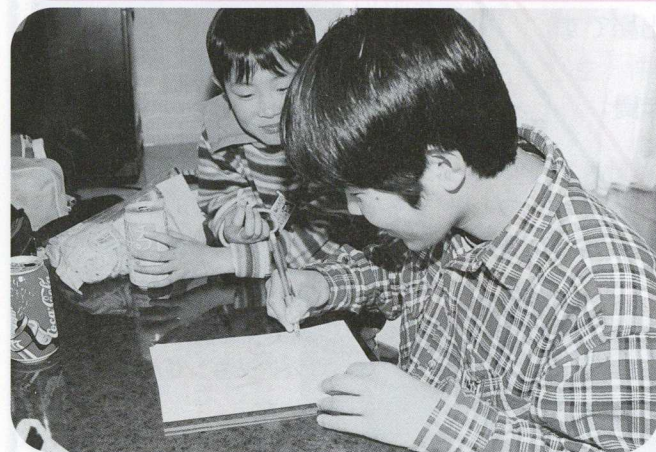
3年生 ちゃった

田川市美術館開館以来、田川市郡の児童・生徒の創作意欲を高め、地方文化向上の一助とする目的で、毎年開催され、今回で9回目を迎える「田川の子どもたちによる絵画展」で、小学校高学年（5・6年生）の応募数228点の中から、小学校6年生の福島勇二君の絵がみごと金賞に選ばれました。

表紙の絵が受賞作「龍と鯉」で、唐津くんちの山車を題材に水彩による点描という描き方で、絵とは思えないくらい実に細かな描写で、完成まで2ヵ月くらいかかりました。福島君のクラスでは、運動会が終わってから制作を始め、仕上がった全作品をクラスで投票し、上位3作品を出品したものです。



す っ げ ー ～ 金 賞 受 賞 ～



福島君は「唐津くんちがかっこよかったので、題材に選んだ。去年は入選だったので、今年金賞を受賞できとてもうれしかった。美術館に来てくれた人たちが、ぼくの絵の前ですばらしいと言っているのが、うれしかった。今は、イラストやマンガを書いている。絵は趣味で描いていきたい。」と話していました。

これからもいろいろな絵を描いて、みんな



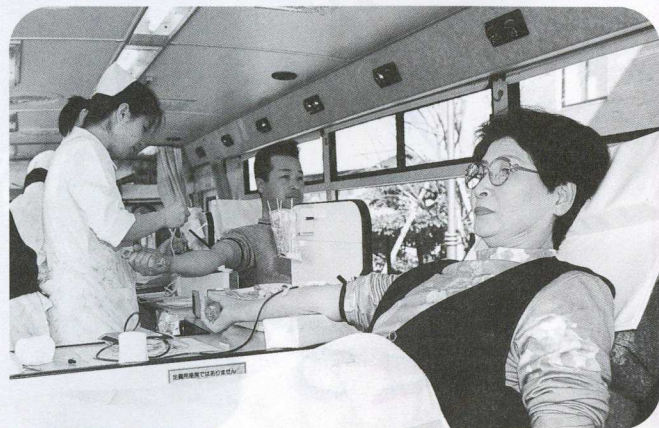
を楽しませてくれることを期待していますよ。勇二君。

また、裏表紙の絵は、同じ絵画展で銅賞を受賞した、小学校5年生の犬塚静香さんの作品「アコーディオンをひく友達」です。

2月20日に実施しました献血
ご協力ありがとうございました。

受付者数 118人
200ml献血 10人 400ml献血 72人
不採血者 36人

今後とも献血にご協力お願い申し上げます。
金田町役場 福祉課



冷たい北風の吹く中、金田町子ども会サッカー大会が2月25日、多目的グラウンドでありました。参加者70人を、小学校低学年・高学年と女子中学生・男子中学生、それぞれ2チームずつの6チームに分け各2試合を行ないました。当日はとても寒く、親たちは火を焚き身体をあたためながら、声援を送っていました。

低学年では、ボールが転がるたびに追いかけていき、だんご状態で試合をしていました。高学年では、ある程度ポジションは決まっているものの、ボールが自分のところに来るまで動けないようでした。さすが中学生ともなると、ボールさばきや身のこなしが俊敏になり、ドリブルで突破する姿も見られました。



走 れ ～

2月21日、金田小学校5年生の1クラスが青葉会の指導で、マリーゴールドの苗付け作業を体験しました。苗をポットの中に入れ、周りに土を入れ押さえる作業でしたが、普段家では土を扱うことがないため、楽しいと言って、2,000鉢作りました。6年生になる頃花が咲くので学校に植え、新1年生をマリーゴールドの花で迎えたいと、がんばりました。



4年生のお礼状
青葉会のみなさんへ

今日、青葉会のみなさんから、マリーゴールドのなえをカップに入れる作業を教えてもらって、ありがとうございました。最初は、あまりわからないなぁと思っていたけど、やってみるとうまくできました。どんどんできていって、ついに全部完成しました。

帰ろうと思った時、1つマリーゴールドをプレゼントしてもらいました。楽しかったですから、また僕たちに、やらせて下さい。

きれいに育て

冷たい雨の中、3月4日春季火災予防訓練が平原団地3階建てを使ってありました。田川地区消防署・金田町消防団と平原地区住民30人の参加で、2階付近から出火、屋上に逃げ遅れた人が居るという想定で行なわれました。女性消防隊による避難誘導、消火器操作指導から始まりけが人の救護・消火訓練・はしご車による救助訓練など真剣に取り組まれていました。



無 事 救 出

来ぶらり

図書再考

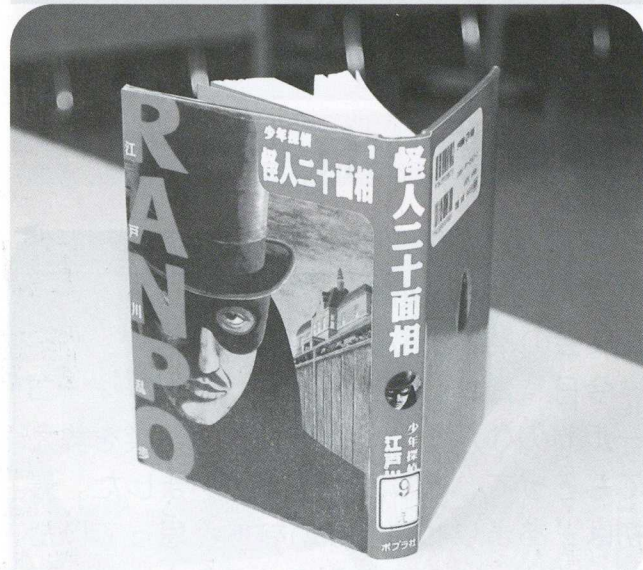
少女A「来ぶらりって英語のLibrary（図書館）を文字ってるとわかるけど
再考って最高の間違いじゃん」

少女B「最高と再考 おやしギャグだよ。きっと」

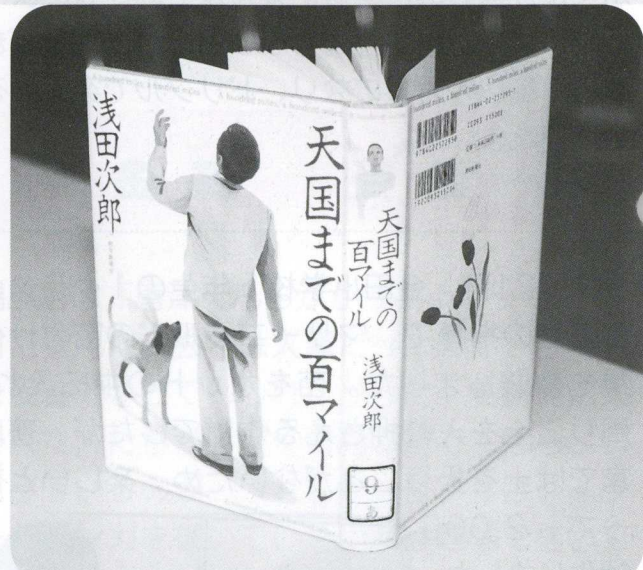
少女A「でも、何が最高なんやか？図書室に行ってみようか。」

少女B「うん、行ってみよう。」

つづく



—— ロマノフ王家の大ダイヤモンドを、
近日中にちょうどに参上する 二十面相 ——
ゆくえ不明だった壮一君の、うれしい帰国のしらせとともに、羽柴家に舞い込んだ予告状。変装自在の怪盗は、どんな姿で家宝を盗みに来るのか。老人、青年、それとも……。怪盗「二十面相」と名探偵明智小五郎、初めての対決が今始まる！全26巻



浅田次郎（あさだ・じろう）
1951年東京都生まれ。1995年に『地下鉄に乗って』で第16回吉川英治文学新人賞を受賞。1997年には『鉄道員』で第117回直木賞を受賞した。主な著書に『蒼穹の昴』『月のしずく』『珍姫の井戸』『見知らぬ妻へ』『霞町物語』など。本書『天国までの百マイル』は直木賞受賞後初の長編小説である。

利用時間 平日9時～16時30分 土・日・祝日10時～16時 休館日 毎週木曜日

子育て講演会のご案内

～子どもたちの豊かな心を育てよう～

子どもたちの豊かな心を育てるためには、本を読むことの楽しさを教えてあげることが大切です。テレビ、ビデオ、ファミコンなどが氾濫している今日、絵本の読みきかせは子どもに集中力と落ちつきを取りもどし、思考力や想像力を育てます。本の読みきかせによって子どもたちは変わってきます。

- 日時 4月14日(土) 14時～
- 場所 浄円寺本堂（金田保育園隣）
- 講師 佐藤宗夫
日本福祉大学講師
日本子どもの本研究会会員
「子どもに読書のよろこび」と
訴え、全国で講演活動を年間200回をこなす。
- 講演内容 「絵本の読みきかせが育てる豊かな心」

ふるさとのおかしな話

ふるさとの飢饉の記録(三)

三、天保の飢饉

天明の飢饉から五十年後の天保四年（一八三三）から同七年にかけて、また飢饉が発生した。天明の飢饉の後も数年おきにひどい天災で不作が続いていたが、天保期になると、元年からは天候不順が続く。同二年・三年・四年・五年・六年と毎年天候不順を繰り返して、そのため凶作が続いて村々は飢饉の様相を呈していた。こうした中で、天保七年の大凶作を迎えて、極限に達した。これを天保の飢饉という。天保七年の庄屋古文書に「この年は春以来雨澤に御座候て、麦作不熟の上、稲穂付後も矢張り雨勝にあり、田方に虫付一初秋まで雨降り続き、雨痛・虫痛にて大いに不毛」とか、六月十二日大雨洪水、同十九日には稲虫が発生して、虫除けに鯨油を使用、七月七・八日は大風洪水に見舞われ、日和乞いの祈祷をしたとか記されている。



年貢の納入の場面

このような凶作続きにもかかわらず、財政の逼迫した小倉藩は着々と百姓からの収奪体制を固めて

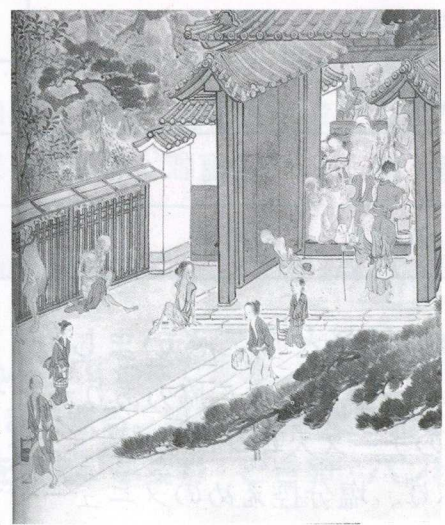
再吟味されてふやされ、その分だけ年貢高も増加した。不作で難業者がでると、これに対して僅かでも救済米を出さねばならず天保四年には藩からの扶助米がだされている。

天保五年には水帳（田島台帳）の改正を行なった。百姓は水帳改正による年貢増加をおそれ、天保六年には田川郡榑手水の榑村の百姓五十人程が訴えのため、日田の幕府代官所と小倉表へ出奔した。大庄屋らが連れ戻し、六人の者が召し捕らえられ、内二人は企救郡秋崎の牢に入れられた。また猪膝・金田手水の百姓たちも小倉表に訴えの筋をもって居村を出発したが、村役の者に途中で説得されて引き揚げなど、騒然としたありさまになりつつあった。

藩政下の税率は、たてまえは四公六民であった。即ち収穫高の四割を税として藩に、六割は百姓に与えるのがたてまえであったが、いろいろな税を付加して実際は五公五民であった。更に藩政中期からは定免制となり、豊作の年も、凶作の年も同じ量の年貢を村の責任で納めなければならなかった。したがって年貢を納めた後生活の困窮する者には「根付料」という名目で米やお金が藩から貸付けられ、年賦で年貢のとき償還させられていた。

飢饉が続いて頂点に達した天保七年、藩は再三にわたって年貢の完納と「根付料」の返済を百姓に強要した。築城郡の大庄屋たちは目下の状況で割当を強行すれば、一揆も起こりかねないの役目を返上したいと申し立てた。築城郡筋奉行の延塚卯右衛門は藩庁に根付料の返済支払を延期するように上申ししたがきき入れられず、板ばさみとなった卯右衛門はついに意を決し、一〇〇〇石に及ぶ貸付証文を焼きすて、

湊にあった郡土蔵を開いて米を窮民にほどこしたうえ、遺書を記したため切腹した。天保七年（一八三六）十二月一日のこと、奉行五五歳であった。



天保の飢饉の図

この後も榑手水の大庄屋榑田甚右衛門が出奔して行方知れずになったり、榑手水の大庄屋榑古左衛門が倒産して、大庄屋辞任に至ったりした。このように百姓からの年貢を吸い上げるだけでは農村の疲弊を進めるばかりであった。そこで小倉藩では国産方の役職を設け、荒地を開墾して新百姓を住ませたり、企救郡で金採掘を試みたり、田川郡でも銅の採掘や石炭採掘を盛んにし、菜種・綿実・櫨の実の栽培を奨励していくことになる。

（寄稿 福田 昌 終